

下肢静脈瘤の患者さんへ

足の血管が浮き出てきて足のだるさやこむら返りがおこりやすくなることがあります。このような病気を下肢静脈瘤といいます。

下肢の静脈とは？

足に酸素や栄養分を含んだ血液を足に送る血管を動脈といいますがこの病気では動脈は通常は正常です。従って静脈瘤によって足が「くさってくる」ことはまずありません。

酸素や栄養分が使われたあとの血液が足から心臓にもどっていく道筋を静脈といいます。足の静脈は大きく分けて2系統あります。筋肉の中を通っていく深部静脈と皮膚の真下を通る伏在静脈です。伏在静脈はその位置によって大伏在静脈と小伏在静脈に分けられます。静脈瘤として見えるのはこの伏在静脈のほうです。深部静脈と伏在静脈とのあいだには連絡する交通枝という血管もあります。



下肢静脈瘤の原因

この病気は下肢の血管に血液がうっ滞することが原因とされています。長年の立ち仕事や女性の出産後にできてくるのもこういう理由です。

うっ滞を引き起こす主な原因としては次の2つがあります。どの原因によるものかによって治療が異なります。

① 深部静脈閉塞

深部静脈が血のかたまり（血栓）でつまってしまうことがあります。つまった当初は足全体が腫れ上がる事があります。こうなると足に行った血液はすべて伏在静脈を通過して心臓に帰らなければならず当然血管は拡張します。深部静脈の血栓がのちにとけても伏在静脈の拡張が残ることもあります。

② 伏在静脈、交通枝弁逆流

ふともものあたりの伏在静脈や交通枝には血液が重力に逆らって心臓のほうに向かって流れるように一方弁がいくつつかっています。なんらかの理由でこの弁機能が悪くなり逆流がおこってしまうと血液は足でいったりきたりしてしまいなかなか心臓まで到達しなくなります。このような場合も外からよくみえる伏在静脈が静脈瘤となってしまいます。

下肢静脈瘤の症状

- 1 足のだるさ
- 2 こむら返り
- 3 色素沈着
- 4 皮膚の傷の治りにくさ、潰瘍形成（重症例のみ）

これらの症状は長年かかって出現し悪化するのであまり自覚されていない患者さんもいます。治療後にすごく楽になったことを実感してはじめて症状がでていたことがわかる方も多いです。

下肢静脈瘤の検査

この病気は放っておいても足がくさってきたり転移したりするものではありません。命にかかわることもめったにおこりません。従って絶対に治療しなければならないものではありませんが、上記のような症状が治ると日常生活が非常に楽になります。治療もほとんどの場合簡単に安全にできます。治療を行うためには上記の原因のどちらかによってまったく異なる方法をとりますので検査によってどの原因が主体かを見極めなければなりません。静脈エコー（超音波）検査は足の表面からエコーを当てて血管の流れ具合をみるものです。これによりほとんどの静脈逆流、深部静脈血栓の有無がわかりますが、人によってわかりにくいこともあります。この検査は人体にまったく悪影響がありませんし痛くもありません。



下肢静脈瘤の治療法

下肢静脈瘤の治療の目的の第一番はだるさやこむらがえりなどの症状の緩和です。手術療法が中心のため醜い静脈瘤をとってきれいにするために余分な傷をつけてしまいます。完全な美容目的の手術ではないことをご理解ください。

① 伏在静脈逆流のある場合

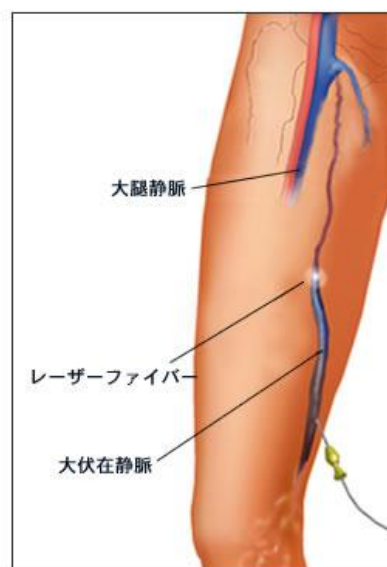
逆流しているばかりで正常の機能を果たさなくなっている伏在静脈をなくさなければなりません。残念ながら静脈瘤は薬では治りませんので手術が必要となります。大きく分けて2種類の手術法があります。

A：伏在静脈抜去術(ストリッピング術)

この手術は昔からおこなわれてきたもので麻酔をかけて悪くなった伏在静脈を太ももの付け根から膝あたりまで引っこ抜いてしまうものです。野蛮な方法のようですが、安全、確実な方法であることは長年の実績で証明されています。当院では引き抜くときの痛みをとるために少しだけ麻酔で眠ってもらいながら行っています。入院は基本的には2泊3日です。術直後は弾性包帯できつく足を巻きます。翌日からは弾性ストッキングで様子を見ます。1週間後と1ヶ月後ぐらいに足の様子をうかがうため外来に来ていただきます。手術の合併症としては局所の出血（皮下出血）、神経痛（まれ）くらいで安全にできます。

B：血管内レーザー焼灼術

近年開発された方法で、膝周囲から伏在静脈のなかにカテーテルをいれ、その先端を太ももの付け根までもっていき、そこからレーザー光線を発して静脈を中から焼いてしまう方法です。うまく焼けてしまえば逆流は止まりますのでふくらはぎの静脈瘤も改善します。傷が小さくて済み日帰り手術も可能ですが、術後の痛みがやや長く（1週間ぐらい）続くので痛み止めの薬を長めに飲んでいただくようにしています。合併症は抜去術のそれに加え、深部静脈にまで閉塞が及ぶ可能性があること、皮膚にやけどを負ってしまうことがあるといわれていますがごく稀です。日帰りで行えますが術後一週間ぐらい



の間に外来に来ていただきエコーで深部静脈の開存を確認するようにしています。あとは1-2ヶ月後に結果を観察するだけでいいです。抜去術もレーザー治療も終了後3カ月ぐらひは日中には弾性ストッキングを着用してもらうことが必要です。そのあとはご自由ですが、再発予防には着用を続けたほうがいいといわれています。

② 深部静脈血栓の場合

この原因の場合は残念ながら根治的な手術はできません。静脈瘤のある血管が足の血液を心臓に返す唯一の道筋となっているので切るわけにはいかないからです。静脈瘤をこれ以上増やさず症状を軽くするために弾性ストッキングを長期間はいてもらいます。これだけでもかなり足が楽になる方がいらっしやいます。

下肢静脈瘤の再発

いずれの治療法によっても一旦治った静脈瘤がまた出てくるということがあります。これは静脈というのは小さいものも含めれば無数に存在し、いま見えている静脈瘤をとってしまってもまた何年かすると小さいものがその代わりをして大きくなっていくことがあるか

らです。ただ再発してくる数は少なく再度手術をするとしても小さな手術で治癒できる可能性があります。再発してくるまでには時間がかかりますしその間は楽に生活ができます。

以上の文章をお読みになってもまだわからないことがありましたら診察や検査時にお気軽にお聞きください。

関西医科大学滝井病院 末梢血管外科
(平成25年2月5日作成：文責 駒井)